

國學院大學學術情報リポジトリ

書評 高見寛孝著『巫女・シャーマンと神道文化
日中の比較と地域民族誌の視角から』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高山, 実佐, Takayama, Misa メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000131

〔書評〕

高見寛孝著 『巫女・シャーマンと神道文化』

日中の比較と地域民俗誌の視点から』

佐々木伸一

本書は、既発表の論文三本に、新たな論考二本に序章などを加えてまとめたものである。本書の意図について、日中比較民俗学を射程に入れている、シャーマニズムに関する諸論考で、「佐々木シャーマニズム論を取り込みながら、柳田國男から桜井徳太郎に至る巫俗研究の学統を継承するもの」と著者は述べる。

本書の全体的評価として、二〇〇〇年代初頭だったら、評者を凌駕するような分析力や記述の力を高く評価したはずであった。ただ、中国でシャーマンの実態を見続け、またポストモダ

ンにおける、民族や文化の概念、歴史観についての荒波に曝されてきた者として、本書の多くは残念ながら、モダンの世界に留まる時代遅れのものでしかない。

三章と五章、特に後者について、修士論文を再構成したそれは、宗教的職能者関連の地域民俗誌の手本になるといつてもいいだろう。しかし、他章とのその大きな乖離について、著者はなぜ認識されないのか。小地域の民俗・宗教事情に関する立体的で抑制的な語り、この積み上げが幾つも重ねられ、初めて全体の構図が垣間見えるはずである。それにはもちろん膨大な労

力と、それを何とか可能にする工夫も必要である。それができない状況で、時空を好きに飛び回り解釈を語る、それは「まともな研究」なのだろうか。

事々を論じる前に、本書が書き下ろしを含む論文集であるため、まずは章立てから紹介をしていきたい。年を記していないのが書き下ろしである。

序章 シャーマニズム研究の可能性

第一章 シャーマニズムと鬼道と神道

第二章 日中憑霊文化の比較 (二〇一二)

第三章 生霊信仰と脱魂文化 (二〇一三)

第四章 シャーマニズムと来訪神信仰 (二〇一一)

第五章 シャーマニズムと地域社会

あとがき

このような構成の本書である。序章では、「日本民俗学の巫女研究」というタイトルで、柳田國男の『巫女考』の「神社ミコ」と「歩きミコ」は同根という説を紹介し、『妹の力』での女性の社会進出についての先見性を述べ、そこから桜井徳太郎の業績について、日本社会でのシャーマニズム関連の具体的調

査と、彼の歴史主義的な知見を紹介し、シャーマニズム研究を通じ、「神道」をそこから明らかにすることを目標としたと述べ、それを踏襲し、その歴史的視点から論を立てていこうとするという。

ここが本書の評価の最大のポイントではないかと思う。ポストモダンの思潮では、歴史がまず問題とされ、それを意識した語が必要であると思うが、柳田や桜井などの論に関してのそれは本書では見られない。

近代に生成された一国主義的歴史観では、「日本」は自明であり、過去から現在の連続性が当たり前のように語られてきた。日本あるいは神道などの「祖形」が過去にあり、変化しつつ継承されてきたという理解がその根底をなす。ポストモダンではこの見直しが必要とされ、桜井が活躍していた時代までならそれでよかったが、現在ではそうはいかないのである。

次節の「宗教人類学のシャーマニズム研究」で、宗教人類学について佐々木宏幹、堀一郎、古野清人のそれぞれの研究の観点を詳述し、三節「佐々木宏幹のシャーマニズム論」では彼の説を適切に解説し、シャーマニズムの定義について佐々木が脱魂・憑霊問題を解決したことにより、著者は比べる土台が比較民俗学への道が開けたとする。

そうかもしれないがこの点について、著者と異なりシャーマニズム研究自体が、ある意味ここで終わったという感想を持つ。戦前に「迷信」としてシャーマンが逮捕され、研究対象にならなかったそれが、桜井ほかの努力で「まともな」研究になった。それゆえエリアーデや訳者の堀一郎が提起したシャーマンとは何かについて、脱魂・憑霊やシャーマン・ブリスト問題が盛んに議論されるようになった。しかし、シャーマンを規定する論争がそれなりに落ち着いた現在、後は何があるのだろうか。

シャーマニズムのベースである、幻聴や幻覚など人間の生理的現象を利用するそれは、人類に普遍的で、「シャーマン」がこうと定まれば、社会的役割などを単に比較するくらいしかないのではと考える。また、シャーマニズムという言葉自体を使う必要性も薄れていると感じるが如何であろうか。

四節では、本書の構成と内容という題で、以下の各章をまとめていく。以下は紙幅の関係でこれをもとにまとめた。

一章では、まずシャーマニズムについて取り上げる。それを研究することで、日本文化の特殊性と普遍性ならびに日本の起源を明らかにできるとする。続けての節で、卑弥呼と鬼道の問題に触れ、それをシャーマニズムにしないとする論は妥当で、

次節で固有宗教としての神道についての研究史をまとめ、それが仏教招来により意識化されたという指摘も重要である。関連しての、「三国志」などから抽出した神の去来性・託宣性・現世利益性を神道の中核とするにも問題はない。ただこの論で抜けるのが「日本人」とは誰かという議論である。著者の発想として、そこに相形としての日本人がおり、彼らがそれを担ったと読める。しかしこれはモダンの見解でしかない。歴史を遡っていけばモンゴロイドの移動の一支脈で、旧石器と縄文の人々・新たな渡来者を含む弥生人の生成、その誰が相形としての日本人に当たるのだろうか。

また、神道の基本として上記三点を挙げるが、託宣と現世利益はほぼ東アジアで共通し、「去来」という点について、その可能性を探りたいが、稲に関するそれは、東南アジアへの広がりを持つ。加えて陸稲栽培が縄文時代からとする論もあり、なかなか難しいといえよう。

二章では日中憑霊文化の比較というタイトルを掲げる。そこで「両国のシャーマニズムを比較して、ただ単に似ている点と違っている点とをあげつつも意味がない」と述べ、「佐々木宏幹の提言にあるように、歴史的アプローチと機能・構造的アプローチから、それぞれの地域で宗教文化複合を明確にしな

ければならない」とする。正論であるがこれは不可能である。

まず、漢族にはシャーマンという概念はない。それはモンゴル族や満族の「薩滿」のことになる。漢族のシャーマンにあたる存在は「迷信」として禁じられている。こういった状況で、日中シャーマニズムの比較という語りは、簡単ではない。^①

一九九七年から中国大陆で漢族が主に居住する省と直轄都市全てにおいて、シャーマンに比定される人々を調査してきた。

著者の言う地域民俗誌的な形を意識してきたが、無限とも思われる多様性の連続のなかで、著者が見出したいような本質は識別できなかった。^② 評者の力不足を否定はしない。ただ、調べたといってもその地域は限られ、他に何が出て来るかわからない状況では、まず懷疑が先に立つ。本質論やカテゴリー構築をしてはならないという実感がいつもあった。単に比較する、それすらも難しいのである。

では古典を使った歴史的アプローチはどうか。本書での詳細は省くが、日中の古典から憑霊現象を抜き出しての比較について、中国調査を行う前だったら適切と評していたろう。しかしその多様性を知ってしまうと、時も場所も異なる事例を抜き出しまとめたそれは、一体何を表現するのか。根本的な疑問が生じる。ただし、これは本書に限られる訳ではない。中村治兵衛

や澤田瑞穂の著書についても同様で、今ではそれは単なる面白い話でしかないと考える。

これに関連して、中国では民俗を歴史的に遡って考えることは難しい。貴州省での見聞だが、そこは江南と同じ民俗であり、原因として明代に江南から確か三〇万の兵隊が送られ、男を皆殺し妻や娘を自分の嫁として住み着いたと教えられた。初めて大陸では大掛かりで凄まじい人口の移動があると知ったが、岡田英弘などによればそれは常態で、人口移動が少ない日本の歴史とは異なるのである。^③ それが実際とすると、極めて限られた史料しかなく、人々の連続性に関する保証が全くない事情であれば、民俗に関する数千年に渡る歴史へのアプローチ、それは手を出さない方が賢明と思う。

なお著者は同章で憑霊現象について、佐藤憲昭の論をもとに憑霊についての分類を行っている。詳細を省くが、これらはそのときどきの文脈のなかで考える方が適切ではと思う。特定の状況を前提にしてタイプを設定すると、それ自体が考え方を制約し、それ以外のもの排除する可能性があるからである。これについては後述する。

三章は、魂が生者の体から抜け出すという考えに基づく語りについて、源氏物語・今昔物語・高知県物語・佐賀のそれぞれ

の生霊、沖縄のシャーマンの成巫過程、病氣の原因、死の予兆といった事例に加え、中国の漢族や少数民族のシャーマンの脱魂と病因についての事例を提示し、魂が意図的に抜け出すそれを「脱魂」、非意図的なものを「遊霊」と名付け、遊霊は普遍的で非歴史的な文化として位置付けられるとする。この遊霊をもとに脱魂という宗教文化が生まれたと論じる。遊霊という名付けについて、適切な判断は差し置くが、うなずける論である。

事例について評者もおおよそ把握している。ただ問題として、病因論以外についてどれもその扱がりはなく、魂が抜けるという点で同じにせよ、時間、場所、要因において様々な事情からすると、著者の言うここからの大きな発展はいかがであるか。

四章は、来訪神信仰について概説した上で、奄美のウムケ・オホーリ、西表のアカマタ・クロマタ、石垣のマユンガナシなどを事例として詳説し、シャーマニズムから考えようとする。その関連で奄美沖縄の女性神役のシャーマン性についても併せて述べる。

日本人の神観念研究に新たな視点を提供する目論見とするが、奄美・沖縄の事例だけではそれは無理であろう。この点に

については後日待ちたい。ただ気になるのは、二章の憑霊の類型設定と本章はどのようにつながるのか。人が仮装して神になる、シャーマンの女性神役には「カミケ」があるとよくいうが、これらは憑霊と何がどう違うのか。本書にない話で恐縮だが、仏像などの魂入れ、こういった類はどう考えればよいのか。シャーマニズムから離れたパースペクティブを想定する必要があるのではと思う。

五章は平戸市の宗教的職能者全般に関する調査報告で、初めに述べた通りでその評価は高いが、先に触れたようにこの論を本書でどう位置付けるのか。実証に徹したそれと、そうではないものの、一つの組上にそれは並ばないはずである。

いずれにせよポストモダンの思潮について、何らかの見解を論に交えなければ、それぞれの論は現在では有効性を持たない。ただ評者も、モダンでの文化概念を否定した場合、それに代わる文化観はどのようなものかと、試行錯誤していることは付け加えておきたい。最後に、本誌はこの本を書評するに値すると考えたのか、聞きたいところである。

(A5判、二二六頁、岩田書院、二〇一四年六月刊、定価三〇〇〇円＋税)

注

- (1) これまでの調査で「シャーマン」の行為は、代替可能な「術」の一つと把握でき、鈴木清一郎『台湾舊慣冠婚葬祭と年中行事』台湾日日新報社、一九三四、台北、でも同様の見解が見受けられる。
- (2) 京都外国語大学図書館・機関リポジトリを参照。『無差』という学科紀要で、二本の論考を掲載しており参照されたい。
- (3) 岡田英弘『世界史の誕生』（ちくまライブラリー）、一九九二など。